

博物館と利用者に意識変化は起きるのか ～コロナ禍のハンズ・オン展示をふまえて～

神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸員 田口公則
大島光春

1. はじめに

このコロナ禍は、ハンズ・オン展示の在り方を再考する機会となった。ほとんどの博物館でハンズ・オン展示の中止または消毒回数を増やすなどの感染対策が講じられた。当館では触れる展示物に柵を設けたが、来館者がその柵に衝突するという事態を生んだ。一方、美術館では床のテープやゴム紐程度の簡素な結界でも有効なことが多い。この違いの原因を考察する。

また、触れることができなければハンズ・オンではないのか？ 例えば展示を見上げる行為は、高さ（大きさ）に関するハンズ・オンだと見なすことができる。ハンズ・オン展示を展示空間の総合的なデザインという視点で再確認することで展示企画者と来館者の両者の意識変化をとらえることができるのではないか。コロナ禍はその試みの好機会と考える

2. 新型コロナウイルス感染拡大予防対策

2020年の緊急事態宣言以降、「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」をふまえて種々の対策を講じた。たとえば、入館者数と時間の制限、動線の誘導、検温、マスク着用、手洗い手指の消毒等のほか、消毒液の設置、ハンズ・オン展示物の規制等である。また、展示室の日々の点検では、展示ケース上の手垢（指紋などの汚れ）などの確認と清掃・消毒の作業を学芸員が行った。



図1. 展示室入口の注意喚起サイン。



図2. 展示ケースガラス面の手垢（右側の3本の縦筋）。

ハンズ・オン展示物での具体的な対策は、サイン掲示による注意喚起、柵（スチールまたは紐等のパーティション）の設置、押しボタンスイッチ等の展示規制である。自然史博物館の展示物は標本が使われており消毒による対策は難しいため、来館者が展示物に触ることを制限した。

3. 触れる展示物対策の問題と原因

1) 展示ケースに触る

「展示物には触らないでね」等の注意喚起サインにより、標本を中心とした展示物への接触は少なくなっている。しかし、ガラス面に残る手垢を見る限り展示ケースへの接触は未だ多い状況にある。

問題点は、ガラス面に手垢が残るほどの状況であり、これはすなわち接触感染（ものに触ることでの感染）を生みやすい状況といえる。

展示ケースに触る原因は不明であるが、つぎの要因が推測される。

- ・ガラス越しの標本を間近に見るなどの際にうっかりガラスに触れる
- ・展示物（標本）と展示ケースに対する意識の違い
- ・手垢が残りやすい手

展示ケースのガラス面がいわば手すりとして機能してしまう場合、無意識に手を当ててしまうことが予想される。また、興味関心の高い展示物に対して思わずガラス面に触れてしまうということもあるだろう。また、手垢が残りやすい手の状況要因として、あきらかにベタベタした手垢などを見ると、ジェル系消毒液の使用が浮かび上がる。

2) 柵への衝突

触れる展示物として人気の高い「マンドラビライん石」展示と「アンモナイトの壁」展示については、スチール製の棒の柵（パーティション）を設置した。パーティションの高さは40cm、ひとつの棒の長さは150cmである。重量のある四角いスチール製ポールと連結してパーティションとしている。

想定外であった事実のひとつが、このパーティションのスチール製棒がときに外れているということである。日々の展示点検の際に、スチール棒がポールの接続部品から外れ単にポールに載せてあるという状況が見つかった。これはあきらかにスチール棒が外れたことを示している。おそらくは、来館者が外れたスチール棒を元に戻したが上手に接続することができなかったのであろう（簡単には接続できない仕組みとなっている）。

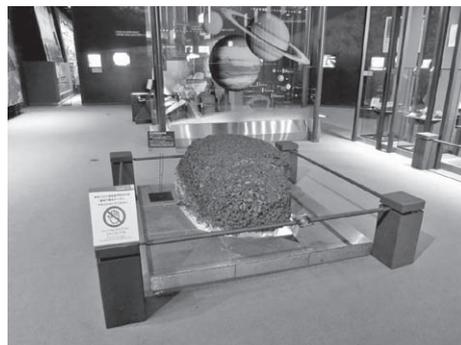


図3. 「マンドラビライん石」と結界.

どのような状況でパーティションを外してしまうのかは、直接観察の例がなく、不明である。足が少し当たる（ぶつかる）程度では外れないので、外れる時はそれなりの勢いで衝突しているものと思われる。想定される状況・要因は、パーティションの存在に気づいていないというケースである。展示物に視線がいき、周囲の状況が目に入っていないことがある。実際、小さい子どもの例として、別の展示ケース越しに「アンモナイトの壁」展示を見つけ、そのまま直進しガラス面に衝突する、という事例が目撃されている。高さ3m、幅8mの「アンモナイトの壁」は、見学者から見れば、見上げる大きさの展示物となる。見上げることで、足下のパーティションに気づかず衝突してしまうという状況が予想できる。

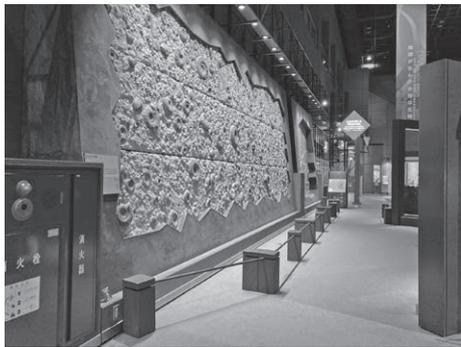


図4. 「アンモナイトの壁」と結界.



図5. 結界の接続部.

4. 触れる展示物対策に生じた問題点の対応案

講じた対策の現状と問題点が見えてきたので、その解決策・対応案に触れておきたい。

・接触頻度の高い箇所の見極め

展示ケースのガラス面の手垢は、展示物やガラス面の位置などによって、見つかる頻度が異なる。触れる頻度の高い箇所（高接触部位）が把握できれば、注意喚起や消毒作業において重点的な対応が可能となる。また、手垢についてポジティブにとらえるならば、ガラス面に触れる原因を掘り起こすことがすなわち来館者行動を知ることにつながり有用であろう。

・パーティションの設置変更

まずは、パーティションのスチール棒を外れにくくするという対応が求められるが、スチール製パーティションへの衝突を繰り返す状況であれば、現行パーティション什器の変更についても検討の必要がある。什器変更については、二つの方向性がある。ひとつは、より存在が目立ち、しっかりした造りのものへの変更であり、もうひとつは、簡素な紐や床面に引いたシンプルな線といった物理的な衝突を生じないものへの変更である。

5. 美術館と自然史博物館との違い

本報告で取り上げた展示ケースに触れることやパーティションへの衝突という状況は、ミュージアムの館種による違いが予想できる。あくまでも個人的な印象となるが美術館では、静かに鑑賞する雰囲気などにより、ある種の緊張感が存在する。そのような状況では、展示ケースに触るという行為は意識的に避けるであろうし、シンプルなフロアサインによるパーティションであっても作品に近づかない効力をもつであろう。一方、当館のように広い空間のミュージアム（動物園などはもっと開放的であろう）では、相対的に開放感・解放感が生じやすいものと想像できる。同様に、来館者層の違い、小さい子どもが多いのか大人ばかりなのか、という要素もその展示空間の雰囲気に影響する。

6. コロナ禍の変容はミュージアムでの行動を変えるか？

このように美術館と自然史博物館の展示室の雰囲気（もしくは緊張感）に違いが見られるが、この違いも一連のコロナ禍による新しい行動様式の登場により変化するのではないかという期待がある。すでに、ミュージアムの利用においても、私たちの行動様式を変容させている。たとえば、施設入場の際の検温やアルコール消毒という行為は、もはや日常といってよいだろう。

ハンズ・オン展示に大きく関わる「触れる」という行為自体にもある種の緊張感を持つようになる可能性がある。「触ることを意識する」というよい意味での緊張感である。触る前には手指を消毒し、触った後にも手指の消毒をする。注意喚起のサインに注意を払いながら、展示物に触れていく。触る際にこれまでとは違う何か意識が生じるのではないか。それがよい意味で触ることを意識させ、触ることをより意味のあることにするのであれば大いに歓迎できる。

意識が育つことで、パーティションの存在についても深い理解が期待できる。ちょっとしたサインが心理柵として機能していくことだろう。

7. 展示空間の総合的なデザインとハンズ・オン

最後に、当館の天井の高い展示空間における展示物がもつハンズ・オンについても触れておきたい。

本報告で扱った要素の一つは、コロナ禍での制約された展示室での来館者行動である。新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドラインのもと、「ハンズ・オン展示は原則中止、展示物には触れさせない」という制約で生じた現場での些細な問題点や原因と解決案を紹介した。さらに、コロナ禍での行動様式さらには意識の変容をかんがみて、展示物との接し方（意識上の）の変化に触れた。



図 6. 見上げる展示物（大木の板根）.



図 7. 見上げる展示物（柱状節理）.

触ることができなければ体験できないハンズ・オン（展示）が多い。しかし、体をつかった「実感」や「体験」をハンズ・オンの本質とするのであれば、触れることができなくとも自分の意識が働けば、そこには体験のハンズ・オンが生じているともいえる。乱暴な言い方になるが、「展示空間に身を置く」という状況のみでもハンズ・オンの効果は生まれるのではないだろうか。

「アンモナイトの壁」展示のパーティションへの衝突の項では、展示物を見上げたことで足下の周囲が疎かになった可能性を述べた。そこには「見上げる」という体をつかった展示物とのつながり（自分自身の内での展示物との呼応）が生じている。「アンモナイトだ」という展示物の認識とともに「大きいな」という情緒的意味を感じているのではないだろうか。

展示物の中には、単なる「大きいな」という感情で終わるものだけでなく、その「大きさ（高さ、厚さ）」に意味を持ち、より深い情緒的意味を感じさせるものもある。たとえば、生命展示室の大木「板根」展示物は、大木の高さを実感・想像させるものである。また、地球展示室の巨大岩盤展示群にある「柱状節理」は、その高さ（厚さ）が柱状節理を作り出した溶岩流の厚さであることを知れば、展示物を見上げるという行為にも大きな意味をもたせることができよう。

繰り返しとなるが、コロナ過での種々の制約は、ある種の緊張感を生み出しているとともに新しい感覚を鍛える機会にもなりうると考える。このまだモヤッとした部分に、来館者にとっても、博物館側にとっても、博物館展示のニューノーマルの可能性を感じる次第である。

謝辞：本発表にあたり、JSPS 科研費 JP18K01112 の一部を使用した。

